

観光  
研究

レビュー

第23回

# APTA 年次国際会議 参加報告

観光文化情報センター  
旅の図書館長  
企画室長  
主任研究員  
福永香織

観光文化情報センター  
清水愛



開会式の様子

## Asia Pacific Tourism Association APTA の 概要

- 韓国・東亜大学のHai-Sik Sohn教授を中心に1995年に設立されたツーリズム・ホスピタリティ分野の国際組織。
- 年1回の国際会議の開催、Social Sciences Citation Index (SSCI) に登録されている学術誌Asia Pacific Journal of Tourism Research (AJTR)の発行、APTA e-News Letterの発行などをおこなっている。編集責任者は香港理工大学のKaye Chan氏がとめており、APTAのメンバーであれば無料でアクセスが可能である。
- 各国の観光・ホスピタリティ産業界の交流機会を提供し、研究者と実務家のネットワークの拡大、研究成果および実践事例の共有による観光研究や観光産業の質の向上を目的としている。

表① テーマ別研究発表件数

テーマ	件数
Tourism Management	24
Hospitality Management	7
Tourism Education	7
Regional Tourism	6
Tourism IT	6
Foodservice Management	5
Human Resource Management	4
Food/agritourism	4
Media & Tour	4
Culture & Heritage	4
Special Topics	4
Methods in Travel & Tourism	4
Sustainability	4
Research in Tourism & Hospitality	3
Festivals	3
Gaming Management	3
Tourism Economics	3
Special Tourism	3
Peer-to-Peer Accommodation	3
Strategic Management	3
Health & Medical	3
計	107

※Thesis-in-progress SessionとPoster Sessionは含まない。

2017年6月18日から21日にかけて、韓国・釜山のノボテルアンバサダー釜山を会場に23rd Asia Pacific Tourism Association Annual Conference (以下、第23回APTA年次国際会議)が開催された。本稿では、会議の様子と研究発表の動向、パネルセッションの概要について紹介したい。

## 会議の様子と研究発表の動向

APTA年次国際会議は、Asia Pacific Tourism Association(以下、APTA)が年に1回開催する国際会議である。今年も、23年ぶりに第1回目の開催地である釜山で開催された。

プログラムは4日間にわたり、基調講演(注1)、研究発表、ポスターセッション、パネルセッション、オプショナルツアーなどが行われた。韓国、オーストラリア、アゼルバイジャン、カナダ、中国、ドイツ、香港、インドなど25カ国から

293人が参加し、終日、盛んに交流する様子が見られた。

研究発表は、テーマ別に5つの会場に分かれておこなわれた。1人あたり15分の発表と5分の質疑応答時間が与えられており、平均4人程度で1つのセッションが構成されている。大学に所属する研究者の発表が大半を占めるが、シンクタンクの研究員による発表も5件(4.6%)みられた。また、日本からは立教大学、和歌山大学、高崎経済大学、帝京大学、芝浦工業大学、千葉大学、東京工業大学、杏林大学のほか、民間シンクタンク2社が発表をおこなった。発表件数は11件(10.2%)であった。

テーマは21に分類されており、最も発表件数が多かったのが「Tourism Management」(24件)であり、次いで「Hospitality Management」(7件)、「Tourism Education」(7件)、「Regional Tourism」(9件)、「Tourism IT」(6件)と続く(表1)。

ビッグデータやIT・メディアを活用したツーリズムに関するセッションやAirbnbをテーマとしたポスターセッションには、多くの研究者が集まっており、

表 2 BEST PAPER CANDIDATES

タイトル	著者
ACCESS FOR ALL? BEACH ACCESS AND EQUITY IN THE DETROIT METROPOLITAN AREA	Jin Won Kim, University of Florida; Sarah Nicholls, Michigan State University
EFFECT OF FRANCHISING ON INDUSTRY COMPETITION: THE MODERATING ROLE OF THE HOSPITALITY INDUSTRY	Kyung-A Sun, Temple University; Seoki Lee, Pennsylvania State University
HYBRID REVENUE FORECASTING SYSTEM FOR INTERNATIONAL HOTELS	Yi-Hui Liang, I-Shou university
A STUDY ON THE ASSESSING MODEL OF POTENTIAL FOR ORGANIC AGRITOURISM DEVELOPMENT	De-Jian Liu, National Kaohsiung University of Hospitality and Tourism; Ching-Chen Shen, National Kaohsiung University of Hospitality and Tourism
TOURISM DEVELOPMENT AND REGIONAL PRODUCTIVITY EFFICIENCY: EVIDENCE FROM SOUTHWESTERN CHINA	Bo Zhou, Management School, Xiamen University; Yanping Xu, Xiamen University
THE MEASURE AND DETERMINANTS OF TOUR GUIDES' ETHICAL BEHAVIOR: AN EMPIRICAL STUDY IN MAINLAND CHINA	Xiaoyi Wu, Xiamen University; Xuemin Zhang, Xiamen University; Derong Lin, Xiamen University
UNDERSTANDING THE DECREASING TREND OF INTERNATIONAL ARRIVALS TO CHINA BY SEGMENTING TOURISTS: THE CASE OF QUEENSLAND RESIDENTS	Guang-hui Qiao, Human University of Science & Technology; Yong-hai Li, Henan University of Technology; Bruce Prideaux, Central Queensland University; Deng-hui Zhang
HOTEL EMPLOYEE WORK VALUES IN INDONESIA	Sienny Thio, The Hong Kong Polytechnic University; Brian King, The Hong Kong Polytechnic University
THE EFFECT OF MONETARY AND NONMONETARY PROMOTION ON CONSUMER PERCEPTIONS	Mina Woo, Sogang University; Yameng Wang, University of Surrey; Sangwon Park, University of Surrey
ASYMMETRIC TOURIST RESPONSES TO EXCHANGE RATE UNCERTAINTY: NEW EVIDENCE FROM INBOUND TOURIST FLOWS IN SOUTH KOREA	Junwook Chi, University of Hawaii at Manoa

世界的な関心の高さがうかがえた。また、活き活きと発表をしている研究者が多く、質疑応答においても、参加者と発表者が一体となって活発な議論が展開されている点が印象的であった。発表論文の中から最も優れた研究に贈られるThe Best Paper Awardにちなみ、フロリダ大学のJin Won Kim氏とMichigan州立大学のSarah Nicholls氏によるACCESS FOR ALL: BEACH ACCESS AND EQUITY IN THE DETROIT METROPOLITAN AREAが選ばれた。The Best Paper Awardの候補は表2の通りである。

注1) 基調講演はMr. Bob Harayda氏 (Senior Vice Presidents & CFO, Marina Bay Sands Pte Ltd) により、“Prospect and Issue of Integrated Resort Development: Experience of the Sands Group” というテーマでおこなわれた。

注2) APTAの発表によると、ポスターセッションも含めた論文の採択数は79.5%とのことである。採択された論文の発表要旨は [http://apta.asia/wp/wp-content/uploads/2017/09/APTA2017\\_ABSTRACT\\_PROCEEDINGS.pdf](http://apta.asia/wp/wp-content/uploads/2017/09/APTA2017_ABSTRACT_PROCEEDINGS.pdf) で見ることができる。

注3) 次年度はフィリピンのボラカイ島での開催が予定されている。

ポスターセッションの様子



# APTAパネルセッション 「Smart Tourism: Challenges for the Future」

スマートフォンやスマートエネルギーなど、近年注目が集まる「スマート」という考え方の中で、観光におけるスマートとは何か、あらためて考えさせられた本セッションの内容を紹介したい。

スマートツーリズムをテーマにおこなわれたパネルセッションでは、Jinwen University of Science and Technology, TaiwanのYulan Yuan氏がファシリテーターをつとめ、3名の研究者がそれぞれの専門分野から話題提供をして議論が展開された。各発表内容は以下の通りである。

## 1 「スマートツーリズムとビッグデータの将来展望と方向性」

Capital University of Economics and Business, China Jeffrey Li 氏

Jeffrey Li氏は、スマートツーリズムという表現が流行り言葉のように使われ、必要性も叫ばれているものの、その定義やニーズが整理されていないと指摘した。その上で、スマートツーリズムを「革命的観光情報サービス」であるとし、①旅行者への情報提供、②個別の旅行者へのサービス向上、③場所・チャネル・時間を問わない旅行者への情報提供、④観光事業再編と観光団体の最適化、⑤ビッグデータによるマーケティングとマネジメントの変革や旅行者経験の向上であると定義した。

## 2 「パートナーをつなぐスマートホスピタリティ」

Department of International Tourism and Hospitality,  
I-Shou University, Taiwan Rosanna Leung 氏

Rosanna Leung氏は、特に中小企業などがITに投資することの難しさを挙げた一方で、天気や経済といった全ての要素をつなぐことで強固なマーケティングを可能にする述べた。その上で、例えばAIを利用し、ビッグデータを分析して良いシナリオを打ち出す等、①統計的および運用的な視点に役立つこと、②集計され

たビッグデータは全てを統合する力を持つこと、③クラウドプラットフォームの統合やデータの所有権といった面で課題があることを指摘した。

## 3 「持続可能な観光地の競争力」

College of Hotel and Tourism Management,  
Kyung Hee University, South Korea Chulmo Koo 氏

Chulmo Koo氏は、スマートツーリズムは「システム」であること、ICTへの準備は観光産業の重要な要素の一つであること、競争力を高めることが観光産業にとって重要であることを指摘した上で、スマートツーリズムによる競争力強化のためには、①オープンデータ化、②アクセシビリティの向上、③快適性の拡大、④観光産業従事者の支援が重要であることを述べた。

以上3名の話題提供の後、ファシリテーターのYulan Yuan氏は、スマートツーリズムはあくまでも未来に向けた概念であり、必ずしもITに頼るものではないこと、かつ、旅行者の行動はITだけでは測れない側面があることを補足した。会場の参加者からは、「スマートツーリズムの定義はどの立場からみるかによって変わるものであり、ホストとゲストそれぞれの視点が必要ではないか」「ビッグデータへの投資やアクセスが難しい中小企業はスマートツーリズムの波に乗るのが難しいのではないか」といった意見が挙がった。

## おわりに

APTAの特徴としては、扱われる研究テーマや参加する研究者のバックグラウンドが多様であるという点が挙げられる。そのため、普段接点が少ない分野の研究や、情報が入りづらい各国の観光動向や課題を効率良く知ることができる点は有意義であると感じた。国内の学会とは異なる海外の国際会議に参加することで、研究の視点、アプローチ、研究スタイルなど様々な面において刺激を受けた。